

演劇・映画が好きになった理由

1



埋め立てられる前の打浦橋周辺。現在は上海・黄浦区内の経済・観光地区として賑わっている。（打浦橋は地名として残されている。）

紙上でのイメージ化への不満

46年前のある晩秋の夜、私は上海美術専門学校を出て菜市路（今の順昌路）の突き当りの川岸に沿って歩き、打浦橋をゆっくりと渡っていた。川の水は濁っていてずっと生臭い臭いが漂ってきていた。両岸は一面ごみに覆われ、厩葬(さくそう)①用の小屋と埋葬後の土饅頭が、荒れた草むらの中に雑然と造られていた。私が河辺にたたずみ、鉛筆とスケッチブックを取り出し、さて何を描こうかと考えていたそのとき、突然耳をつんざくような甲高い泣き声が私の思考を破った。私はすぐに泣き声のした方を見た。

すると向こう岸に一隻の小舟が近づいていて、船首には塗装されたばかりの棺が置かれ、白い布を巻いた女性が棺に覆いかぶさり泣いているのが見えた。小舟は接岸して止まった。数人の男が棺を抱えて岸に上げた。棺は日干しレンガで造られた小屋の中に置かれ、小屋の上は瓦で覆われていた。その女性は紙銭を燃やしながら苦しみを訴えていた。痩せた五、六歳の男の子が杖を立て、婦人の横で身を縮めながら、好奇心を抑えきれないような目ですべてを見ていた。

①厝葬……中国で以前行われていた、一定期間棺を安置し、その後埋葬するという葬儀の一形式。

私は思わず橋を渡っていき、船の上にいる人に尋ねた。彼は、泣いている女性はとても苦しい生活をしている中で夫を亡くした。これは彼女にとっては天が落ちてきたような災難だ。もし子供がいなかったら、彼女は悲嘆のあまり亡くなっていただろう、というような話をした。

私はこの悲劇が起こった事情がよく理解できた。辛く悲しい思いが心にこみ上げてきた。私は“未亡人”が死者を安置し、子供の手を握りながら棺の前で何度も頭を地面に打ち付けて拝み、泣き声を上げながら舟に乗りこむのを見ていた。舟は遠くに離れていった。“未亡人”はそこから離れがたいように、ずっと舟首に立って棺小屋を見ていた。

棺の前で焼かれた紙銭が灰となって風に吹かれて舞い上がる。周りは静けさを取り戻し、ただ犬の吠える声だけがとぎれとぎれに聞こえてくる。これが葬儀の終わりで、私はいま見たばかりのことを書き、この墓の社会の悲劇を書き止めなければならないと思った。そこで私は小川を描写し、草むらの中にあつた新しい棺の仮置き場を描写した。……しかし、これらがなんと空虚なものかを発見したとき、私は自分を罵った。何という愚か者かと。私はずたずたに引き裂いた。それから間もなく、『打浦橋』という題の短編小説を書いた。これは1937年鉄流出版が出した私の短編集『華北的秋』に入っている。

発表した後、何度読んでも、いつも満足できなかった。私があの日に見た情景はとても人の心に訴えるものだったのに、私が書いた小説はあまり人の心に訴えるものがなかった。なぜなのか？ 自分の創作能力の不足のほかにも、小説は制限された中における形象化の芸術だということを発見した。小説は紙の上での表現に留まっている。当時、私は仕事をしながら学んでいた。美専(上海美術専門学校)で絵を学びながら天一映画会社②で、彼らが出している『明星日報(スター新聞)』のための宣伝文を書いて

いた。宣伝文の材料は撮影所で得られるので、よくスタジオまで行って撮影を見学し、時には監督を助けて記録の仕事をした。

②天一映画会社（天一電影公司, 天一影片公司）……1925年に邵醉翁とその兄弟によって上海で設立された映画会社。古典に題材を採る映画を製作し、シンガポールやマレーシアでも人気を博した。30年代になると左翼映画運動の影響を受けた映画も作りはじめた。1937年には弟が責任者になりその後拠点を香港に移して香港映画の基礎を築いた。

このようにして宣伝用の資料を集めながら映画撮影に関するいろいろの知識を得ていた。ある夜のこと、スタジオで有名な劇作家であり映画監督である洪深先生が監督している現場を見た。

彼は役者に筋の運びを練習させ、繰り返し内容を話し、登場人物の性格を分析し説明していた。俳優の演技が彼の要求に合うようになってからやっと「カメラ」と撮影の開始の合図をした。これを見て私はひらめいた。映画がなぜ人を感動させるのかわかった。シナリオの中のイメージが再創造されることにより、更に深く生き生きと表現され大きな感動を与えるのだ。この明らかな原理が分かった後、私は自分の小説『打浦橋』のことを思い出した。

小説をもっと磨きあげ、『打浦橋』を題材とした映画の脚本を書いて撮影したら、紙の上につくったイメージがスクリーンの上で生き生きと再現できるだろう。

もしそうなったらどんなにいいだろう！ 私はこの思いを洪深^③に伝え、映画の脚本の書き方を学びたいと言った。彼は承諾してくれて「中国の映画はまだ萌芽期で、脚本書きは彼も含めてすべて余暇の仕事としてやっていることだ。」と言った。

彼は私に、中国で最初の脚本家になるようにと励ましてくれた。しかしまた「それだけでは十分でない、最もいいのは自分が監督になることだ、自分が監督してはじめて自分が書いた脚本を理想的な状態で再創造することができる。」とも言った。この点に関して私はよく理解することができなかつたし、このような過分の望みは持たなかつた。私はただ文芸映画を学びたかつたので、脚本を書くことを奮起する目標として、洪深の教えを仰いだ。

映画の脚本の仕事に就くためにはスタジオでの撮影を多く見てその特性をよく知らなければならない。そうすることでカメラセンスやフィルム編集を学ぶことができ

る。そこで私は真剣に毎日スタジオに通い、洪深や左明④が監督をしているのを見た。二人とも脚本を持っていた。

③洪深（1894—1955）……劇作家、演出家。ハーバード大学などで作劇、演出を学び、中国の演劇の水準を高めた功労者。

④左明（1902-1941）……劇作家、研究家、監督。左翼文学家として抗日戦での宣伝活動に従事した。

邵醉翁⑤が監督をしているのを見たこともあったが、彼はストーリー一本しか持っていなかった。だが頭の中では上映時の場面とカメラに映る場面がはっきりと区別されていた。彼は撮影現場に入ってはじめて場面の説明をして場面記録ボードに書いた。これは彼のかなり粗削りな撮影方法を示すもので、彼の撮影態度も謹厳ではなかったが、映画作りの経験は豊富だった。

いずれにしても私はそれを受け入れなければならなかった。私は彼らから多くのものを学んだ。このあと私は「天一」を離れたが電通公司以て応雲衛⑥が監督する撮影現場を見たことがあった。これらはすべて私が後に映画の脚本を書くための基礎固めとなり、文芸映画を好きになるきっかけとなった。

1936年に私は『モデル』というタイトルで映画用の脚本を書いたことがある。美術学校のモデルの女性の悲惨な生活を題材としたもので、発表後に先生の倪胎徳⑦がそれを読み、笑いながら首を振って言った。彼は美専の教授で、「玄武湖之秋」と「東海之浜」を書いている「創造社」の作家でもあった。

「この題材の映画は、中国ではだれも作ろうとはしないだろう。劉海粟（美専校長）⑧が本物をモデルにして絵を描いたとき、封建的な勢力によってさんざんな攻撃を受けた。もし今、裸のモデルをスクリーンに登場させたら、時代は変化しているとはいえ、物議をかもしるのは間違いない。」

彼がこう言ったので私はすぐにこの脚本を映画にすることはあきらめたが、結局最後には映画の脚本を書く仕事に就くこととなった。

⑤邵醉翁（1896—1975）……中国と香港の映画事業の開拓者。銀行家、弁護士。弟が後に経営を引き継ぎショー・ブラザーズが香港に創立され、カンフー映画を製作して世界の映画界に影響を与えた。

⑥応雲衛（1904-1967）……劇作家、監督。左翼文学家として抗日戦では宣伝活動に従事した。中華人民共和国成立後、文革時に紅衛兵の暴行を受け惨殺された。

⑦倪貽德 (1901-1970) …油画家。1927年に日本に留学して新流派絵画の研究と美術史論を研究した。

⑧劉海粟 (1896-1994) ……油画家。1911年に友人たちと上海美術専門学校の前身となる上海図画美術院を創立。1926年に美専は閉鎖されるが、1952年に設立された華東芸術専門学校の校長となった。

脚本書きに初めて熱中したころ

「七七」事変が勃発した。社会情勢の需要に適應するために、演劇は抗日宣伝の力強い武器となった。「八・一三」以降、上海の演劇界の人々は次々と抗日救亡演劇団を組織した。洪深は私に彼が率いる第二隊に参加するように誘い、左明は彼の率いる第五隊に参加するように誘った。私は親しい友人王瑩^⑨が第二隊にいたので彼女と一緒にいたいこともあり、また洪深について学習することができるので第二隊に参加したかったが、左明は、第五隊は脚本家が不足しているので、どうしても私がそこに必要だとせまり、結局私はどちらにも参加せず、時代の息吹をつかんで創作における最も高いところを目指した戦闘に挑もうと決心した。

⑨王瑩 (1913-1974) ……中国の代表的女優で脚本家、作家、歌手として活躍した。女優時代の江青(毛沢東の妻)オからライバル視され嫉妬されていたため、文革時には反乱分子というレッテルを貼られ投獄され獄中死した。

当時、演劇は大衆に最も人気のある文学表現の形式だった。特に一幕劇と街頭劇では、脚本ができあがればすぐに劇団が公演してくれたので、私は熱心に脚本を書き、自分の作品が舞台上で生き生きと再現されるのを見て、言葉にできないほどの喜びを感じていた。それでさらに演劇が好きになった。

実は、私は高校時代に演劇が好きになり、1932年に最初の戯曲を書いて開封にある新聞社の文芸欄に投稿した。それは従姉が夫から受けたいじめに耐えかねてベルギーに逃げ、自立するという実話をもとにしたものだった。私は赤裸々に封建社会の典型的な「大男子」である従姉の夫を批判した。ところが私の技巧が稚拙であったため、虚構の部分がまったくなく、人物の名前さえ仮称にしなかったため、これは幼稚な失笑を買うような作品となり、大きな風波を引き起こす結果となった。というのは、そのあと従姉の夫は官職を得て、従姉もすでに彼と仲直りをしていたからだ。

母方の祖父の家や従妹の夫の家からは強い抗議が来た。私は叱責され「私が悪うございました」と自分の罪を認めざるを得なくなった。これは反封建主義の運動が成功

せず、封建勢力に打ち負かされたことを意味した！ 内心ではもちろん屈服してはいなかったが、反封建主義に対抗する積極性は失われ、それ以来脚本を書くことはなくなった。

だが「書かないこと」は「好きでないこと」と同じではない。私はそれからも演劇が好きで国内外の古今の戯曲に目を通し、この分野での創作能力を高めるために勉強するぞ、という意志を固くした。

五年後、抗日戦争が私に再び脚本を書く勇気を与えてくれるとは思ってもいなかった。私は愛国思想・反帝国闘争の宣伝のための脚本をたくさん書いた。題材は現実に即したものや歴史的なものから採った。歴史的なものでは『関羽⑩』『木蘭従軍⑪』などで、古典の名作『紅樓夢⑫』の改編など四つの脚本を書いた。

これらの脚本はすべて出版されたが公演されたのは多くない。「あなたの書くものはとても生ぬるく、文学的な雰囲気が高く、読むのには適しているが舞台上で表現するには適さない」と言う人がいた。もしこれが本当なら何を脚本と呼べばいいのか？ それで私は自分に対しての疑いが生じ、抗日戦の後期になると徐々に脚本を書かなくなった。

あるとき洪深が、自分が責任者となっている文化工作事委員会の演劇養成訓所（演劇部）で脚本の書き方の講座を持ってくれないかと言った。私は、自分がまだうまく書けないのにどうして人に教えられるだろう、まった笑い話ではないか、と考えた。しかし洪深から与えられた任務だから断るのは難しい。それで結局、無理をして「教え」にいった。教えている過程で、演劇の理論に関する興味がわいてきた。この期間に私は他の人の脚本の書き方を研究し、自分の経験と結び付けた『編劇方法論』を書いた。これは独立出版社によって出版された。

⑩関羽……蜀漢の創始者劉備に仕えた後漢末期の将軍。武勇伝が後々語られ、神格化され関帝と呼ばれて祀られるようになった。

⑪木蘭従軍……中国の伝承文芸の一つ。父に代わって娘木蘭が男装して敵と戦い、自軍を勝利に導いて帰郷するという物語。

⑫紅樓夢……曹雪芹によって書かれた清朝中期の古典長篇小説。栄華を極めた名家一族の栄枯盛衰が描き出された名作として、中国では『紅樓夢』を専門に研究する学問もある。



映画『自由天地』のポスター
大同電影企業股份有限公司製作
監督：黄漢、主演：周曼華、喬奇。

日本が投降する一年前、私は郷里の抗日戦争の情況を描いた長編小説『月上柳梢』を書いた。1950年にはこれを映画用の脚本に改編し、『自由天地』というタイトルが付けられ大同映画社で制作された。そのあと続けて長編、中編、短編小説や散文、雑文を書き、越劇(古典劇)用の脚本『桃花扇^⑬』だけを書き、これ以降は演劇用の脚本を書くことはなくなった。

⑬桃花扇……清の孔尚任(孔子の64代目の末裔)が書いた戯曲。舞台は南京で、明の滅亡を背景に文士と妓女の恋愛を描いた名作とされている。

□□□□□